

生存科学研究ニュース

Vol. 37, No.2

2022.7 発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp http://seizon.umin.jp

何度 wake up call を受けても
評議員 府川 哲夫



1990 年に「1.57 ショック」という少子化問題の wake up call をうけてから 30 年間、日本は大騒ぎしていわゆる「少子化対策」を行ってきました。社会保障と税の一体改革以降は、「子育て支援」が社会保障の柱の 1 つとして位置づけられ

もしました。しかし、日本が子育て支援に十分な資源をつぎ込んでいない(主要先進諸国の中で未だに子育て支援に最も手を抜いている国の 1 つである)という事実は今日まで変わっていません。

失われた 20 年を経て、日本の国力は大幅に低下してしまいました。その大きな原因の 1 つに、日本が使っているシステムがうまく機能していないことがあげられると思います。以下はその機能障害の事例です。

- ・ 就業者の中で非正規就業がこれだけ増えてしまった日本社会を、正常な姿にもどすことができない。
- ・ 国民に負担を求める改革を先延ばしにし続け、財政赤字は先進諸国の中で最悪になってしまった。
- ・ 大学教育では少子化の影響で学生集めに重点が置かれ、教育の質は二の次になっている。
- ・ 政治の世界では、良い人材を政界に送り込むシステムは作られていない。

そうこうしているうちに、2000 年代後半に日本の総人口は減少し始め、2010 年には GDP 世界第 2 位の座をとうとう中国に明け渡してしまいました。このような下り坂の日本において未曾有の災害がおきました。2011 年 3 月の東日本大震災&福島原発事故は、少子化・雇用の流動化・格差拡大・税の不公平・新たな貧困層の出現、などに対してあまり危機感をもっていなかった日本に対する wake up call であったといえます。

震災直後は、これまでのやり方の延長線上には日本の明るい未来はないと多くの日本人が感じたものでした。しかし、結局、東日本大震災を契機に日本でパラダイムの転換が起こることはありませんでした(ドイツでは福島原発事故を契機に脱原発に政策転換しました)。2021 年に開催された東京オリンピック・パラリンピックは東北の復興をアピールするとされていましたが、実際には東日本大震災の風化を促進したに過ぎなかったように思われます。

2020 年に発生した COVID-19 のパンデミックは日本にとって 3 度目の wake up call かも知れません。日本の医療システムは世界に誇れるものと多くの日本人が思っていました。2021 年になって医療サービスにアクセスできずに死亡する事例が多発し、「新型コロナウイルスに感染し、万一重症化しても、日本では医療サービスで命は必ず救われる」という医療に対する信頼は根底から揺さぶられました。あつてはならない事が起きて、責任をとる人は誰もいません。2022 年 5 月末における新型コロナウイルス感染症による累積死亡数は人口 10 万人当たりで日本は 24.3 人とアメリカの 302.5 人やドイツの 165.8 人と比べて圧倒的に少ない状況です。一方で、アメリカ経済は 2021 年 4-6 月期に、ユーロ圏は 2021 年 10-12 月期にコロナ前の水準を上回っていますが、日本経済は未だにコロナ前の水準を下回っています。パンデミックの影響が欧米に比べて(圧倒的に)少なかったにもかかわらず、日本はこの有利な状況を生かせなかっただけでなく、経済回復でむしろ後れをとっているありさまです。

日本ではエビデンスに基づいた政策決定の事例はまだあまり多くありません。むしろ責任の所在をあいまいにするため、なし崩し的に決定されることも多いと感じられます。独裁国家よりはましですが、成熟した民主主義の国と言うにはまだいろいろな要素が不足していると思われます。

(特定非営利活動法人 福祉未来研究所 代表)

みらいエンパワメントカフェ
～自主研究会の取り組みから～

研究責任者 渡邊 多恵子

我々の研究会は、「生存科学に資するコミュニティエンパワメントに向けた多職種連携のあり方と課題」をテーマに、コミュニティエンパワメント支援に関わる専門職、研究者、当事者が集う研究会である。専門職や当事者の実践に基づく成果、20年以上にわたる追跡研究により住民の well-being と健康長寿を可能にした自治体ベースのコホート研究、同じく20年以上にわたり子どもと養育者、保育専門職を追跡した保育コホート研究の成果、すなわちエンパワメント実践に基づく経験的根拠と大規模コホート研究に基づく科学的根拠の両側面から、生存科学に資するコミュニティエンパワメントに向けた多職種連携のあり方と仕組みづくりについて探究している。

研究会の取り組みの一つとして、「みらいエンパワメントカフェ」を開催している。みらいエンパワメントカフェは、人びとの生き生きとした豊かな「みらい」を開く知恵を、実践者、研究者、当事者がともに語らう場をカフェとして提供する取り組みである。自分エンパワメント、仲間エンパワメント、組織エンパワメントを活用しながら、子どもから高齢者まで全ての人々の明るいみらいを築く輪を広げていくことをめざしている。このカフェを開始してから6年が経過した。振り返ると、実に多様なテーマで開催してきた(表1)。直近2年間(2020～2021年度)は、新型コロナウイルスの影響でオンラインライブ開催となったが、生存科学に資するコミュニティエンパワメントに向けた多職種連携のあり方について焦点をあててディスカッションを展開してきた。この2年を通して確信したことは、同じ目的に向かって多職種がよりよい形で連携するためにまず必要なことは、互いの専門性を理解し尊重し合う必要があるということである。至極当然のことであるが、当たり前すぎて、専門職連携教育の中でもあまり取り上げられておらず、とりわけ学生や新人専門職は、自身の専門性を中心に連携のあり方を考えようとする傾向にあった。

開催7年目となる今年度(2022年度)は、これまでの参加者からの要望を踏まえ、4つ話題を用意した(図1)。今年度もオンライン開催となってしまうが、人々の幸せな未来と生存科学の発展に向け、多職種連携による包括的かつ継続的なコミュニティエンパワメントについてのディスカッションを展開したいと考えている。そのように書くと、難しい話し合いの場を想像してしまうかもしれないが、みらいエンパワメントカフェは、

子どもから高齢者まで誰でも参加可能な場である。コーヒー片手に気軽にお立ち寄りいただけると幸いである。

表1:みらいエンパワメントカフェ話題一覧

年度	話題	話題提供者
2016年度	発達障害の子どもが輝くヒミツを最新科学でひもとく	堀川宏輝先生
	発達コホート成果を子どもたちのみらいに生かす	山縣然太郎先生
	子どもの育ちに活かすほめ～脳科学からのアプローチ～	定藤規弘先生
	幼児教育の現状と今後	無藤隆先生
	ふたごが語る生命のふしぎ～人間・遺伝・進化～	安藤寿康先生
	創造性を育むために大切なこと：脳科学の視点から	小泉英明先生
	ちょっと気になる子を豊かに育てる保育	小枝達也先生
	保育の質向上への動向	秋田喜代美先生
	いざという時に活かすこころのエンパワメント～東日本大震災から学ぶ～	辻一郎先生
	地域ぐるみの子育て子育てエンパワメント	田中裕先生
2017年度	こころとからだの輝く芸術エンパワメント	佐々木博康先生
	生涯元気でいきいきエンパワメント大作戦	芳賀博先生
	支援の質を高めるチームワークエンパワメント～当事者主体の見える化に向けて～	酒井初恵先生
	いのちのめぐみ～自然に学ぶエンパワメント～	松井勲尚先生
	みんなが違ってみないい～多様性を変え合うエンパワメント～	宮崎隆彦先生
	笑顔の循環をつくる～ブランド育成はエンパワメント～	片平秀貴先生
	ともに支え合う地域づくりエンパワメント～司法福祉を超えて～	酒寄学先生
	魅力ある大学づくりによる若者エンパワメント	稲村晋祐先生
	子どもも先生も笑顔溢れる教育とエンパワメント	田村康二朗先生
	めざせ、サクセスフルエイジング～多職種連携ツール活用による地域包括エンパワメント～	武智峰樹先生
2018年度	虐待予防の仕掛けづくりエンパワメント	有村大士先生
	生活におよぶインクルージョン実現に向けたエンパワメント	宮崎隆彦先生
	すこやか親子みんでエンパワメント	篠原亮次先生
	地域拠点としての子育て子育て支援エンパワメント	田中裕先生
	子育て世代包括エンパワメント～保健師、そして、母の視点から～	酒井初恵先生
	質の高い子育て・子育てエンパワメント	鈴木茜先生
	フォーカスグループインタビュー法を活用したエンパワメント	保育パワーアップ研究会メンバー
	多職種連携とエンパワメント	
	根拠に基づくインクルーシブ保育とエンパワメント	
	かわかり指標を活用したエンパワメント	
2019年度	専門職のスキルアップ支援とエンパワメント	
	夢と絆を運ぶ紙芝居～子ども、養育者、専門職、みんなをエンパワメントする表現技法～	半田拓也先生
	お父さんにも支援が必要！～子育て中の父親エンパワメント～	竹原健二先生
2020年度	コミュニティパワーが大学教育をエンパワメント	
	～若者と一緒にコミュニティエンパワメントする取組が教材に～	芹澤高先生
	コロナ禍だって子どもたちにはあそびが必要	荒巻ジャク先生
2021年度	～みんなをエンパワメントするあそび歌～	
	難病や慢性疾患のある子どもと家族のエンパワメント	福島慎吾先生
	～小児慢性特定疾患の子を育てる親の立場からお伝えしたいこと～	本田睦子先生
	学校におけるいじめ・自殺予防を考える～子どもたちの心のエンパワメント～	太刀川弘樹先生
	不登校児の理解と支援～学校における親子のエンパワメント～	原田直樹先生

図1:みらいエンパワメントカフェ2022

やんばるの森研究会

伊是名島公事清明祭および動物儀礼

研究責任者 等々力 英美



当初、沖縄本島での開催の可能性を検討したが、沖縄におけるコロナウイルスの蔓延状況は、一進一退が持続しており、現在も、人口当たりの感染者数と病床率は全国で最も高い水準にある。参加メンバーを沖縄在住に絞りミニ研究会を以下の内容で実施した(参加2名)。

開催日：2022年4月3日 - 4日(沖縄県伊是名島で開催された「公事清明祭」の実施に合わせた。)

開催場所：伊是名島(伊是名玉陵および伊禮家(動物儀礼畜殺)など)

講演内容：「伊是名島公事清明祭および動物儀礼」

講師：高田勝氏

所属：一般財団法人 進化生物学研究所、農業生産法人(有)今帰仁アグリー代表

沖縄在来島豚でも特異な mtDNA のクラスターに入る島豚を閉鎖育種し、琉球弧の在来牛である吐噶喇牛、在来鶏のウタイ・チャーン、タウチー、在来ヤギなどを飼育繁殖する特殊農場、人工授精所も兼ねている。

伊是名島は、那覇市から車と船で約6時間の距離にあり沖縄本島最北部である辺戸岬よりも北西部に位置するやんばるの離島の一つであり、第二尚氏王朝の始祖である尚円の生誕の島と伝承されている。琉球王府の直轄地であった。古くから沖縄では特別な位置づけにある島である。今回の研究会は、開催時期を、4月4日(旧暦3月4日)に限定したが、「公事清明祭(クージシーミーサイ)」が、伊是名島の南東部にある玉陵



伊是名島
(沖縄本島の北西、
フェリーで約1時間)



伊是名玉陵
(伊是名村観光協会 HP より引用)

(たまうどうん、玉御殿とも)で執り行われるからであった。

この伊是名玉陵には、尚円の父である尚稷(しょうしよく)および親族が安置されており、島の南東にある伊是名城跡の北麓に位置する。1688年に三代目尚真王が、現在の位置に重修したとされている。

清明祭は、沖縄本島を中心に、旧暦三月上旬ころに祖先供養の祭りとして行われ、門中(もんちゅう)が、墓前に集まる祖先供養の行事であり、18世紀ごろに中国から伝来した。伊是名玉御殿で行われる公事清明祭は、毎年開催される清明祭で最初に行われ、それから首里玉陵での清明祭を行うといわれる。沖縄全域で行われる一般の清明祭は、これらが執り行われた後に、順次始まるという。

伊是名玉陵の清明祭は伝統的な儀式に従っており、ここで豚の頭、アヒル、鶏などのお供え物や、首里王府から伝えられたとされる尚家の家紋入りの祭器などが並べられ、現在では伊是名村が主催で、現在の伊是名島における当主である銘苅家を筆頭に焼香が始まり親族、村長、村会議議長などが続いた。今回は、研究会メンバーの高田勝氏が清明祭供儀にシマウワー(在来豚)とハートウヤー(在来赤鶏)を提供された経緯で、特別のお計らいで、私も玉陵中敷地内に参列させて頂いた。

沖縄では、日本本土では見られない動物供儀を祭祀



シマウワー(在来豚)頭部
カンダバー(サツマイモの葉)
をくわえている。



ハートウヤー(在来赤鶏)
羽根をさしている。



伊是名公事清明祭の供物



伊是名清明祭儀式
(銘苅家当主の焼香)

(上記4枚の写真は高田勝氏撮影)

研究会等日報

の中で行う。今回、丸裸の家鴨・島赤雄鶏を伝統的な方法で屠殺(前日に島に入っていく)から供犠まで見学させて頂いたことは貴重であった。高田氏のミニ講演会としてのお話しは、これらの供犠の合間を縫って行われた。例えば、沖縄に島豚、島鶏などが残存していたのは、沖縄で続けられている儀礼行事に三牲として家畜、家禽が使われていたとのこと。これらが沖縄の離島環境、つまり、かつての山原の自然や地域共同体の過酷な飼育環境、利用環境に適応した小型の家畜であり、現在のような飼料供給のない過酷な環境でも生存しうる能力に長けていた家畜として選別されてきたこと、が考えられるとのことであった。このことは、本研究会の主題の一つであるやんばるにおける「生物多様性」とヒトとの関わりについて示唆を与えるお話であった。

そのほか、伊是名島在住の酪農家伊禮氏のご案内で、やんばるの離島としての伊是名島が置かれた現在の農業・牧畜状況など、島をほぼ一周する実施検分を行い、今後の離島農業の在り方について解説を頂いた。

今回のやんばるの森研究会の「森」の意味は、単に生態学的自然環境の「森」だけではなく、ヒト(地域共同体)一環境系としての「森」ということについて見直すことができた研究会であった。

事務局だより

賛助会員(個人会員)の名称変更と年会費引下げについて

変更前(～2021年度まで)

個人会員

維持会員	20,000円
シニア会員(75歳以上)	5,000円
ジュニア会員(30歳未満の学生)	5,000円

変更後(2022年度より～)

個人会員

一般会員	10,000円
シニア会員(70歳以上)	5,000円
ジュニア会員(30歳未満の学生)	3,000円

多くの方々を当財団の会員としてお迎えいたしたく、今年度より会費の引下げを実施いたしました。

つきましては、お知り合いの研究者等の方にお声掛けいただき、新規会員の勧誘をお願いいたします。

入会申込書等は[ホームページ](http://seizon.umin.jp/)
(<http://seizon.umin.jp/>)に掲載しておりますので、ご協力をよろしくお願い申し上げます。



夏季休業のお知らせ

当財団では、誠に勝手ながら下記日程を夏季休業とさせていただきます。

■夏季休業期間

2022年8月15日(月)～8月19日(金)

休業期間中にいただいたお問合せについては、業務再開後に順次回答させていただきます。

皆様には大変ご不便をおかけいたしますが、何卒ご理解の程よろしくようお願い申し上げます。

